様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２１０３

研究課題名（和文）父親の養育スキル向上におけるメカニズムの解明

研究課題名（英文）Mechanism for improving father's parenting skills

研究代表者
小山　里織（Koyama, Saori）

広島修道大学・健康科学部・研究員

研究者番号：４０４５８０８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本申請では，父親の養育スキル向上のメカニズムの解明のために子どもの不快的な情動（泣き）を父親がどのようなプロセスで解釈するかについて明らかにした。さらに2ヵ月と4ヵ月の縦断研究によって泣きの認知プロセスの発達について検討した。
父親の泣きの認知プロセスは消去法的認知プロセス，反復的認知プロセス，解釈先行的認知プロセス，ルーチン的認知プロセス，試行錯誤的認知プロセス，認知処理なしの6つに分類された。さらに2ヵ月から4ヵ月にかけて子どもの発達に伴い変化すること，その変化に母親の役割が重要となることが示唆された。本研究成果の一部をECDP(2019)で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子どもの泣きについて母親を対象とした研究の多くは育児不安や虐待を防止するために早期における育児サポートの充実をはかることを目的としたことから，育児期初期の泣きの認知プロセスに焦点が当てられてきた。それに対して父親を対象とした研究はそもそも泣きの認知について検討したものが少ないだけでなく，育児期初期の父親を対象としたものが少なく，さらに認知プロセスについて検討されることはなかった。本研究結果によって育児期初期にある父親の泣きに対する認知プロセスが明らかになり，さらに父親の泣きの認知プロセスに母親の役割が重要となることが示唆された。本結果は父親の育児サポートを充実させるうえで貴重な結果といえよう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to examine fathers’cognitive process in response to infant crying and to investigate how this process changes from the age of 2 to 4 months.
The fathers’cognitive process in response to infant crying was classified into the following six patterns: (ⅰ) Cognitive process of elimination; (ⅱ) Iterative Cognitive process; (ⅲ) The first interpretation in the cognitive process; (ⅳ) Routine cognitive process; (ⅴ) Trial and error cognitive process; (ⅵ)No cognitive processing. It was shown that there were characteristic patterns of fathers’cognitive process at 2 and 4 months of age. Another feature of the fathers’ cognitive process was that many fathers showed Pattern6 at both ages. However, there were a certain number of fathers who did not perform cognitive processes. Therefore, we consider that this result is due to individual factors within the fathers rather than a tendency in fathers in general.

研究分野：発達心理学

キーワード：父親　育児

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年，子育てに関わる父親が年々増加し，男性の育児参加が注目を集めている。そうした中で，父親がクローズ・アップされ，研究対象として取り上げられることが多くなっている。その中では，父親が育児に参加することで，人格的な成長があるとか，前向きなコーピングスタイルを獲得できるなどが指摘されている（加藤,2008;大野,2012 など）。しかし，その一方で，父親が抱えるストレスが増加しているという指摘もある。例えば，父親の年齢が若いほど「育児疎外感」を強く感じ，分業意識の高い父親ほど「父子関係不安」を抱えていることが指摘されている（冬木,2008）。今まさに，時代と共に変化する父親のニーズに応えることが，父親研究に期待されている。

２．研究の目的

本申請では，子どもの泣きに対する父親の認知プロセスについて，母親の発達研究の成果を適用すると同時に，これまで行った父親の発達研究を基盤として以下 3 点について，ジョイント・インタビューを行いその詳細を明らかにした。

1)父親は子どもの情動を知覚してから，どのように認知的処理を行っているのか。

2)子どもの情動に対する父親の認知的枠組みは，父親の対処行動に影響するのか。

3)父親の情動認知的枠組みに影響を与える要因は何か。

３．研究の方法

対象者　調査開始時に 2 ヵ月の乳児を持つ夫婦 10 組。平均年齢は父親 30.0（26-39）歳，母親 30.3（26-41）歳であった。対象児は第一子（男児 2 名，女児 8 名）であった。すべての対象者が核家族であり日中の主な養育者は母親であった。

調査時期　2017 年 2 月-2018 年 7 月。

手続き　知り合いを通して紹介を受けた夫婦 10 組に対して，子どもが 2 ヵ月と 4 ヵ月の時期に家庭訪問をして半構造化面接を行った。本研究では実験ではとらえきれない自然な日常シーンの泣きをとらえるために 1~2 時間程度のジョイント・インタビューを実施し，各家庭での日常的な泣きのエピソードについて収集した。面接に際し研究の趣旨，内容，情報の取り扱い等について文書及び口頭で説明したのち，対象者が研究参加に同意した場合，同意文書に夫婦による署名を得た。

調査内容　父親が同室していることを条件として，子どもの泣き場面について母親在室場面（在室場面）と母親不在場面（不在場面）を 2～3 エピソード程度回答してもらった。在室場面は父親と母親が同室しているときに子どもが泣き出した場面である。泣きのエピソードでは，子どもの様子，泣いた理由，対処，結果，泣き止まなかった場合の対処が順に記された用紙をみせながら質問内容の教示をした後，一つのエピソードについて父親の語りが終了してから次に母親に対して同じエピソードについて同じ手順で質問することを伝えた。父親の回答中に母親が回答したり，父親が母親に回答を求めた場合は，会話を中断せず自由に語ってもらった。

分析方法　子どもが泣き始めてから泣き止むまでの語りを一つのエピソードとし，非日常的な泣きのエピソードを除いた 2 ヵ月 31 エピソードと 4 ヵ月 29 エピソードの合計 60 エピソードを分析対象とした。本研究では小山ほか（2020）が示した父親の泣きについてのカテゴリーを参考に父親が泣きと判断した感覚情報の語りを「知覚」，泣きの解釈に関連した状況の語りを「状況」，子どもの要求が何であるか見極めようとして，原因を自分なりに考えて理解したことを示す語りを「解釈」と定義した。「知覚－状況－解釈」という一連の認知プロセスを想定し次に示す手順に従って分析を行った。まず，エピソードを意味のあるまとまりに区切り，その内容について各カテゴリーに基づいてコーディングを行った。次にカテゴリー間の経時的な関連性を明確にするために語られた順番と文脈から時間軸に沿ってコーディングされたエピソードを整理した。そしてエピソード毎に「知覚」「状況」「解釈」の各カテゴリーの経時的な配列や関連性について KJ 法を参考に類似したエピソードに分類しまとまりのある認知パターンとした。最後にそれぞれのまとまりに特徴的なカテゴリーの配列やカテゴリーの関連性を特定し，これらのパターンにラベルを付けた。パターン化の信頼性を検討するために，ランダムに抽出した 14 エピソードについてどのパターンに分類されるか別の心理学の研究者 1 名が評定し一致率を確認したところカッパー係数 k=.83%と高い一致率を得ることができた。

４．研究成果

（１）泣きに対する父親の認知プロセスのパターン

泣きに対する父親の認知プロセスは 6 パターンあることが示された。それらは最初から確信のある解釈に絞りこんで問題を解決するパターンと，確信のない解釈あるいは解釈のないまま泣き場面が展開されるパターンに大きく分けられた。Table1 に泣きに対する父親の認知プロセ

スにおける 6 パターンの特徴及びその内訳を示した。

Table1 *2ヵ月と4ヵ月の各場面における子どもの泣きに対する父親の認知プロセスのパターンとその内訳*

		確信のある解釈				確信のない解釈･解釈なし	
		①消去法的認知	②反復的認知	③解釈先行的認知	④ルーチン的認知	⑤試行錯誤的認知	⑥認知処理なし
特徴		複数の原因について,「知覚」や「状況」を擦り合わせて一つずつ消去して「解釈」していく	「知覚」や「状況」を擦り合わせて繰り返し同じ「解釈」をすることで確信的な「解釈」にする	子どもが泣き始めるのと同時に「解釈」をした後「知覚」や「状況」によって裏付ける	日課となっている育児と結びつけて「解釈」をする	「解釈」を基に対処行動をとるのではなく,確信のないまま対処行動と「解釈」を繰り返す	泣きに対して関心を示す語りはない。エピソードをとおして積極的な「解釈」に至ることはない
2ヵ月	在室場面	1.2.4.9.9.10.	2.4.8.9.	—	3.5.	—	5.6.7.10
	不在場面	1.3.5.6.9.10	2.3.4.6	—	—	—	6.7.7.7.8
4ヵ月	在室場面	—	2.4.7.	1.4.5.6.9	2.3.3.5	1	7.8.10
	不在場面	—	—	2.6	9	3.4.4.5.9	3.5.7.8.10

注. 数字は対象者IDである。2ヵ月31エピソード（在室場面16エピソード，不在場面15エピソード），4ヵ月29エピソード（在室場面16エピソード，不在場面13エピソード）の合計60エピソードを対象とした。

パターン①：消去法的認知プロセス　パターン①は 60 エピソード中 12 エピソードあった。最初に「知覚」や「状況」から暫定的に複数の原因をあげ，時間経過とともに別の「知覚」や「状況」を擦り合わせて最初の解釈の中から原因を一つずつ消去して，最終的に確信的な解釈に絞り込んでいくことから消去法的認知プロセスと名付けた。

パターン②：反復的認知プロセス　パターン②は 60 エピソード中 11 エピソードあった。「知覚」や「状況」を擦り合わせ最初にした「解釈」について，別の「知覚」や「状況」を擦り合わせ繰り返し同じ解釈をすることでより確信的なものとしていくことから「反復的認知プロセス」と名付けた。

パターン③：解釈先行認知プロセス　パターン③は 60 エピソード中 7 エピソードあった。子どもが泣き始めるのと同時に「解釈」をすることから解釈先行認知プロセスとした。「解釈」の後，すべてのエピソードで「状況」が語られた。解釈先行認知プロセスでは「解釈」から語りが始り，その後「知覚」や「状況」によって解釈の裏付けをしてから対処行動に移っていた。父親は子どもの泣きを誘発する特定の日常場面を把握していることが特徴であった。

パターン④：ルーチン的認知プロセス　パターン④は 60 エピソード中 7 エピソードあった。このパターンはすべてのエピソードで日課となっている育児と結びつけて「解釈」をすることからルーチン的認知プロセスと名付けた。ルーチン的認知プロセスの多くは「日課：寝る時間帯」と泣きを結びつけて解釈しているものであった。他には「食事中」「入浴中」などの日常的な時間的制約のある「状況」から解釈するエピソードが語られた。

パターン⑤：試行錯誤的認知プロセス　パターン⑤は 60 エピソード中 6 エピソードあった。父親は解釈を基に対処行動をとるのではなく，確信のないまま対処行動と解釈を繰り返すことで次第に泣きの原因を見極めようとすることから試行錯誤的認知プロセスとした。試行錯誤的認知プロセスでは，「知覚」や「状況」から泣きの解釈を試みるが，その解釈は消去法的プロセスや反復的認知プロセス，そして解釈先行認知プロセスのような確信的なものではなく，解釈と対処を繰り返すことで次第に泣きの原因を見極めようとすることが特徴であり，父親は試行錯誤した対処行動の末に子どもが泣き止むことで初めて原因を判断することができた。

パターン⑥：認知処理なし　パターン⑥は 60 エピソード中 17 エピソードあった。パターン⑥は「知覚」や「状況」が語られても泣きに対して関心を示す語りはなく，エピソードをとおして積極的な解釈に至ることはないため「認知処理なし」とした。

（2）　2ヵ月と 4ヵ月の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴

2 ヵ月では消去法的認知プロセスと反復的認知プロセスを示したエピソードが多かったことから，この 2 つの認知プロセスは 2 ヵ月の父親に特徴的な泣きの認知プロセスと考えられる。消去法的認知プロセスが最初に絞り込んだ原因が複数あったのに対して，反復的認知プロセスは泣きの直後から一つの原因に絞り込んでいたことから，反復的認知プロセスの方がより効率的な認知プロセスといえるだろう。ただし，どちらも共通して泣き始めた段階で解釈の手がかりとして「知覚」や「状況」をキャッチして，いくつかの原因のなかから可能性の低い原因を排除することで確信のある解釈をしていた。そしてどちらも「解釈」を 2 回以上して対処行動をとろうとしていた。さらにこれらの認知プロセスは特定の対象者によるものではなかった。これら結果から 2 ヵ月では全般的に父親は子どもが泣いたときに消去法的認知プロセスと反復的認知プロセスのいずれかの認知プロセスを経て泣きの対処をしていると考えることができる。本結果から 2 ヵ月において父親は子どもが泣いたときに，母親と同様に数ヵ月の子どもとの関わりのなかでおおよそ泣きへのイメージを持ち合わせ，そのイメージを想起することによって「知覚」と「状況」が利用可能な情報となり，それらを擦り合わせて効率的に泣きの解釈をしていると考え

られる。
4ヵ月では解釈先行的認知プロセスとルーチン的認知プロセス，そして試行錯誤的認知プロセスが多い傾向にあったことから，これらの認知プロセスは 4 ヵ月の父親に特徴的なものと考えられる。解釈先行認知プロセスとルーチン的認知プロセスについて，この 2 つのプロセスは「解釈」の順番に違いはあるが，どちらも子どもが泣き始めてから「解釈」までの時間が短く，一回の解釈で認知プロセスが終了していた。この結果から 4 ヵ月になると父親は子どもの泣きに対して瞬時に確信的な解釈をした後に，すぐに何らかの対処をしているといえよう。4 ヵ月では父親は 2 ヵ月の頃よりも育児経験が豊富になることで泣きのイメージがより明確なものとなるのではないだろうか。その結果「知覚」や「状況」を擦り合わせるプロセスを踏まずに泣いたらダイレクトに解釈するというシンプルな認知プロセスを辿ることが多くなるのかもしれない。一方で 4 ヵ月は試行錯誤的認知プロセスが多い傾向があった。試行錯誤的認知プロセスは原因が分からないまま解釈と対処行動とを繰り返すことが特徴である。子どもの泣きの原因は 2 ヵ月頃「おむつ」,「空腹」,「眠い」などの生理的欲求によるものが多いのに対して，4 ヵ月頃になると生理的欲求だけでなく，「遊んでほしい」,「一人にしないでほしい」といった心理社会的欲求による解釈が増えることが母親を対象とした研究で報告されている（田淵ほか,1998）。このように変化する子どもの欲求に対して父親はそれまでの育児経験を頼りに確信を持った解釈ができず試行錯誤するのかもしれない。4 ヵ月にこのような一見相反する泣きの認知プロセスが認められたことは，2 ヵ月から 4 ヵ月の時期において父親の認知プロセスが子どもの発達的変化に伴い発達する一方でそれまでの泣きのイメージに修正が必要となることを示唆するものと考える。ただし，本研究では子どもの運動機能や情緒の発達による泣きの認知プロセスへの影響については触れていない。今後，子どもの発達要因について質問紙調査や観察調査によって調べることで，父親の認知プロセスの発達との関係を検討する必要がある。
認知処理なしは 2 ヵ月と 4 ヵ月でほぼ同数あり，特定の対象者の語りが多かったことから，2 ヵ月で認知処理なしを示した父親が 4 ヵ月でも同じように認知処理なしを示したことになる。したがってこのパターンは全般的な父親の特徴というよりむしろ一部の父親に特徴的なパターンであると考えることができる。認知処理なしのパターンは母親の泣き研究では認められなかった結果であった。このパターンが 10 名中一定の割合で示されたことは父親の泣きの認知プロセスを理解するうえで貴重な結果といえよう。

（3）在室場面と不在場面の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴
解釈先行的認知プロセス，ルーチン的認知プロセス，試行錯誤的認知プロセスは在室場面と不在場面でエピソード数に偏りがあり，解釈先行的認知プロセスとルーチン的認知プロセスは在室場面に多く，試行錯誤的認知プロセスは不在場面に多かった。そして，これらは 4 ヵ月に多くみられた認知プロセスであった。先述したように子どもの泣きの原因は 4 ヵ月頃になると 2 ヵ月の頃より生理的欲求によるものが少なくなり，心理社会的欲求によるものが多くなる（田淵ほか，1998）。心理社会的欲求による泣きの解釈には，「母親がそばにいなくて不安」「自分に関心を向けてほしい」などがあることから，子どもは母親が一緒にいる場合，欲求が満たされていることが多くそもそも泣きの原因が限定され泣きの解釈が容易となる。結果として父親の泣きの認知プロセスがシンプルなものとなると考えられる。
一方，試行錯誤的認知プロセスは不在場面のエピソードが多い傾向にあった。母親が近くにいない場面では子どもの泣きに対して父親は原因を見極めることに悪戦苦闘している様子がうかがえる。4 ヵ月になると 2 ヵ月とは異なる子どもの欲求に対して父親一人ではそれまでの経験を頼りに解釈できずに対処と解釈を繰り返してしまうのではないだろうか。ただし，父親のなかには母親が側にいない場面でも，解釈先行的認知プロセスによってスムーズに泣きを解釈し対処しているケースがあった。そのようなエピソードを語る父親は夫婦の共有体験を基に母親の不在時でも直ちに確信をもった解釈をして対象行動をとり，仮に子どもが泣き止まなかったとしても解釈を変更せずに落ち着いて対応したことが語られた。したがって，4 ヵ月にみられる子どもの発達的変化に対して全ての父親が試行錯誤して解釈しようとするわけではないと考えられる。4 ヵ月の母親不在時に解釈先行的認知プロセスを示した父親は，新たに出現した子どもの欲求に対して普段から母親と一緒に解釈することでこの時期の泣きのイメージがすでに形成されており，母親の不在時に子どもが泣いても泣きのイメージを容易に想起することができ，適切な泣きの解釈ができるのではないだろうか。逆に母親と一緒にいるときに父親が母親にすべてを任せてしまうと母親がいない場面で子どもの変化に対して順応できずにいつまでも試行錯誤的認知プロセスを繰り返すことになるのではないだろうか。これらの結果は 4 ヵ月において父親自身の育児経験が豊富になったことに加え，母親が近くにいることで母親の解釈や同調が得られより泣きの解釈がスムーズになっていることを示すものを言えよう。実際，母親の影響については他の認知プロセスにおいても同様の効果が認められた。父親の育児参加には母親の調整能力が影響することが指摘されている（柴山，2007）。本結果からも養育行動の先行要因となる認

知プロセスに母親の調整行動が間接的に影響することが示唆されたといえよう。

イクメンプロジェクトが進行し父親研究が社会において注目を集めるなか，父親がどのように子どもの情動を認知して対処行動を選択しているか。影響を与える要因は何かを解明することは父親研究の重要テーマといえよう。本研究の結果において父親の泣きの認知プロセスが常に同じプロセスを辿るのではなく，月齢や場面の条件によって異なることが示された点は新たな知見であり，父親の養育行動の発達を理解するうえで有意味なものと考える。また，父親の泣きの認知プロセスと母親の存在との関連について，2 ヵ月では在室場面と不在場面に特徴的な泣きの認知プロセスは認められず，4 ヵ月ではその違いが顕著となることが示された。特に 4 ヵ月の母親の不在時に試行錯誤的プロセスが多いという結果は父親の泣きに対する認知プロセスの発達に母親の存在が重要となることを意味するものと考える。今後，母親の調整能力と父親の認知プロセスとの関連について行動レベルでの検討をすることで父親の育児サポートに必要な知見を積み重ねていくことが期待される。

〔引用文献〕

小山里織・森山雅子・小林佐知子・小原倫子・西野泰代．（2020）．乳児の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴：夫婦の情報共有との関連から．健康科学研究（広島修道大学），3，75-88．

柴山真琴．（2007）．共働き夫婦における子どもの送迎分担過程の質的研究．発達心理学研究，18，120-131．

田淵紀子・島田啓子・坂井明美・炭谷みどり．（1998）．生後 4～5 ヵ月児の泣き声に対する母親の反応．日本助産学会誌，12．76-79．

加藤邦子（2008）．専業主婦家庭における父親のワークライフバランス：父親の子どもへのコミットメントが子どもの自発性に及ぼす影響．家庭教育研究所紀要，30，163-174．

大野祥子（2012）．育児期男性にとっての家庭関与の意味：男性の生活スタイルの多様化に注目して．発達心理学研究，23，287-297．

冬木春子（2008）．父親の育児ストレス　大和礼子・斧出節子・木脇奈智子（編）男の育児・女の育児－家族社会学からのアプローチ－　昭和堂．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小山里織，森山雅子，小林佐知子，小原倫子，西野泰代	４．巻 3
２．論文標題 乳児の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴：夫婦の情報共有との関連から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 健康科学研究（広島修道大学）	６．最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://id.nii.ac.jp/1080/00002842/	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小山里織，森山雅子，小林佐知子，小原倫子
２．発表標題 乳児の泣きに対する父親の認知過程の特徴:夫婦の情報共有との関連性に着目して
３．学会等名 第31回日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Saori K., Masako M., Tomoko O., Sachiko K.
２．発表標題 Changes in the cognitive process of fathers in response to infant crying
３．学会等名 EADP Conference 2019（European Association of Developmental Psychology）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小山里織，森山雅子，小林佐知子，小原倫子
２．発表標題 子どもの泣きに対する父親の認知過程の変化
３．学会等名 第30回日本発達心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小山里織，森山雅子，小原倫子，小林佐知子
２．発表標題 子どもの泣きに対する父親の認知と対処行動:生後2ヵ月の子どもの泣き場面における父親と母親のやり取りに着目して
３．学会等名 第29回日本発達心理学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 氏家 達夫、島 義弘、西野 泰代（編）小山里織	４．発行年 2018年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 272
３．書名 個と関係性の発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小原　倫子 (Obara Tomoko) (10450032)	岡崎女子大学・子ども教育学部・教授 (33943)	
研究分担者	森山　雅子 (Moriyama Masako) (90532432)	愛知江南短期大学・その他部局等・准教授 (43924)	
研究分担者	小林　佐知子 (Kobayashi Sachiko) (20630651)	静岡県立大学短期大学部・短期大学部・教授 (43807)	